

目指す学校像	SSH指定校として「自主・自律・創造」の校訓のもと、自ら育んだ高い「志」を実現し、次代を担い国際社会をリードする人材を育成する。
--------	--

重点目標	1 SSH指定校としての取組を起点に、全校生徒の「志」を育み、一人ひとりの第一志望の進路を実現する。 2 自ら課題を発見し、解決する主体的な学習態度を育てるとともに、授業の質を向上させ、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 3 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 4 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、グローバルな研究活動を展開して国際社会へ開かれた学校に発展させる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

学 校 自 己 評 価							学 校 関 係 者 評 価	
年 度 目 標				年 度 評 価			実 施 日 令 和 年 月 日	
番 号	現 状 と 課 題	評 価 項 目	具 体 的 な 方 策	方 策 の 評 価 指 標	評 価 項 目 の 達 成 状 況	達 成 度	次 年 度 へ の 課 題 と 改 善 策	学 校 関 係 者 か ら の 意 見 ・ 要 望 ・ 評 価 等
1	<現状> ○今年度より、SSH2期目に入る。2期目に新たに加わる事業と、6年間で行ってきた事業の融合を図り、これからの5年間の具体的な方向性と計画を考え実践していく。 ○今年度2回目となった大学入学共通テストは291名が受験し、274名が受験した。これは3年生の9割にあたる人数である。また、5教科受験者は92名で、昨年度から18名増えた。現役国立大学合格者は40名となり、そのうち34名が国立大学へ進学した。ここ数年は9割前後の受験者数が定着しており、大学一般受験の傾向が着実に浸透している。共通テストリサーチの結果がD判定やE判定でも、諦めずに志望を貫いて合格した生徒も複数名いた。 ○令和3年度からの新大学入試について、受験をはじめとした進路に関する情報量において、教職員間に差が見られる。 <課題> ○SSH2期目の指定と、次期学習指導要領を踏まえた、本校の課題研究型授業の構築が大きな課題である。SSH推進部やカリキュラム委員会はもとより、全職員一丸となった対応が必要である。研究指定となる「さいたまSTEAMS教育」も積極的に推進する。 ○全教職員が情報を共有できる環境を作り新入試の準備を行い、担任・副担任が生徒・保護者へ正確な情報提供を行えるように協力する。 ○国立大学を選ぶ視野を全国に広げさせ、募集枠が増えている学校推薦型や特別選抜型からチャレンジさせ、合格のチャンスを拡大させたい。	SSH校としての取り組み	① 6年間の取り組みを客観的に評価し、新規事業の実践で、SSH行事・課題研究などが生徒及び教員にどのような変容をもたらすことができたのかを評価していく。 ② 指定2期目のスタートにあたり、学校全体のコンセンサスをとり、具体的な目標と方向性を整理し学校全体で共有できる環境を構築する。	① 過去6年間に行われてきた様々な評価を分析、さらに、他校SSH校の研究を行い、SSH事業の取り組みについて総括する。得られた結果を元に新規事業開拓ができたか。 ② 本校のSSHの取り組みはSTEAMS Timeおよび課題研究を中心に多くの教員から協力をいただくことができてきたか。積極的に意見を交換できる環境を構築していく事ができたか。				
2	<現状> ○授業でのiPad活用や、学習支援ソフト、テレビ会議アプリなどを使ったICT教育・オンライン授業、アクティブラーニングの推進がさらに求められる。 ○1年生の「STEAMS TIME」、2年生「数理探究」における課題研究の内容の充実が求められる。特に教科横断型の「STEAMS TIME」について、効果的な授業展開が求められる。 ○観点別評価の導入にともない、各教科における評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法についても検討し、指導と評価の一体化を目指す。 ○入学者選抜においてさらに倍率を高めるべく募集業務の検証、改善をすすめていく。 <課題> ○海外との交流事業の変更改善を検証し、学校全体の取り組みとして位置付けていく。 ○各分担で業務の内容、進め方について検証し、1業務複数体制の徹底を継続する。 ○担当者の入れ替わりを考慮し、業務の引き継ぎを含め、さらなる効率化を図る。	生徒の学力向上に向けて全校で取り組む、ICTの強みを生かした授業力向上 学校説明会参加者の増加と内容の充実、志願者の増加 国際社会へ開かれた学校づくりをするために、国際交流を学校全体で協力して行う。 多岐にわたり量も多い業務内容について、効率の良さや継続性の検証。	① 「STEAMS TIME」「数理探究」において、生徒が主体的に学習課題を見つけ、論理的思考を身につけ、課題解決力を身につけられるよう授業を展開する。 ② ICT機器をフル活用し、授業支援サービスやテレビ会議アプリを利用した教育実践を順調に進め、アクティブラーニングの実践を促進し、効果的な新しい授業・指導法の方策を研究する。 ③ 観点別評価における評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法等について校内に周知を図る。 ④ 授業アンケートを実施し、授業改善に役立てる。 ⑤ 中学校・塾とできる限り連携し、きめ細かな情報交換を行う。 ⑥ 学校説明会を充実させ、理解を深めてもらう。 ⑦ 学校案内やHPでの情報発信の方法を改善し、積極的に広報活動を行う。 ⑧ 海外派遣事業、留学生受け入れを実施する際に充実したものになるよう、これまでの課題を踏まえて検討する。 ⑨ 効率的な取り組みを検討し、実施する。 ⑩ 業務を複数で取り組むように努める。特に次年度に引き継げるよう、担当で業務の進め方の工夫を図る	① 「STEAMS TIME」「数理探究」の課題研究において、科目の目標に沿って生徒が主体的に学び、課題解決能力を身につけ、充実した発表ができたか。 ② 授業支援ソフトやテレビ会議アプリを使い、新しい形の教育を効果的に提供できたか。 ③ 指導と評価の一体化が実現できたか。 ④ アンケートが実施され、授業改善に役立てられたか。 ⑤ 具体的方策を実行できたか。 ⑥ 学校説明会等参加者数を多く確保し、満足してもらえる内容で行えたか。 ⑦ 普通科理数科ともに高倍率を維持できたか。情報を効果的にHPを通じ発信できたか。 ⑧ 交流事業において、参加した生徒が満足や達成感を感じ、成果をあげられる計画になっているか。 ⑨ 特に時間割編成、変更業務が効率化できたか。文書の適切な保存管理を行えたか。 ⑩ 1業務複数体制で実施できたか。				
3	<現状> ○「自主」「自律」の校訓のもと多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。 ○自転車通学、交通機関利用通学ともに多くの生徒は安全に登下校をしている。 ○教育相談の件数が、年々増加しているためカウンセラーと相談しやすい環境作り <課題> ○生徒自ら学校生活の中で主体的に判断し行動できるような活動を促進する。 ○年々減少している事故件数がゼロになるよう職員、生徒へ喚起を促す。 ○規則正しい生活習慣を確立し、自己管理・安全意識を向上させる。 ○早期に相談に来られるような体制づくりを進めていく。	安心、安全な高校生活 教育相談との連携	① 生徒自ら安心安全な高校生活が送れる環境作りを風紀委員が中心となって行う。 ② 登下校マナーアップ・駐輪マナーアップ・挨拶運動を風紀委員会が行う。 ③ 委員会活動を教職員がサポートする体制を整える。 ④ 携帯・インターネット安全教室を年度当初に実施し、年間を通じて生徒の意識向上を図る。	① 風紀委員、教職員による各活動が1年間を通して行われたか。 ② 登下校、駐輪、挨拶のマナーアップが図れたか。 ③ 教職員がしっかりサポートできたか。 ④ 携帯・インターネット安全教室を実施し十分な指導ができたか。				
4	<現状> ○先の見えない新型コロナウイルス感染症環境下において、withコロナに対応した取り組みの開発をおこない生徒に提供していく。 ○特にグローバルプログラムやSSHサイエンスフィールドワークを重点に実行していく。 <課題> ○地域の理数教育拠点校として、本校の「STEAMS TIME」の取り組みを、アウトリーチ活動を通じて、市内の小中学校に伝えていく。 ○また、小中学生のサイエンスに対する興味関心を高めていくと同時に「さいたまSTEAMS教育」の核となる生徒の育成を図る取り組みを実践していく。	SSH校としてのグローバルサイエンスリーダーの育成 SSH校としての地域の理数教育拠点校としての取り組み	① 生徒の想像力、探究力および発表能力を育成するために行われるSTEAMS TIME、サイエンスに対する興味関心を高めることを目的に実施されてきたサイエンスフィールドワークなどをコロナ禍で実施する具体的な計画を作成する。 ② コロナ禍でもオンラインだけでなく現地を訪れるグローバルプログラムやサイエンスフィールドワークを実施し、双方向かつ継続的な活動を行う環境をつくる。	① 第1期で行われてきた内容から発展した行事に対し、新しい状況に対応するための計画実施することができたか。また、行われた行事に対して生徒はどのような評価を行ったかを検証する。 ② グローバルプログラム・サイエンスフィールドワークの内容の充実を図ることができたか。参加者アンケートの結果より評価する。				
			① コロナ禍でも「自由研究サポートプログラム」、「ASEP Jr Hi」の内容をさらに充実させるため、準備段階をさらに充実させ参加者の満足度を上げていく。 ② 「STEAMS TIME」の実践を通して、地域の理数教育拠点校として市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開していく。	① 地域の小学生および中学生に対してサイエンスに対する興味関心を高めるためのイベントなどを企画実行することができたか。 ② コロナ禍でも「STEAMS TIME」を計画通り実施し、市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開することができたか。				